

2020年横浜ナザレン教会復活節第三主日礼拝  
「神の国の種」ルカ福音書13:10～21

【聖書】

エゼキエル書

ルカ福音書 13:10 安息日に、イエスはある会堂で教えておられた。<sup>11</sup>そこに、十八年間も病の霊に取りつかれている女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。<sup>12</sup> イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、<sup>13</sup> その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した。<sup>14</sup> ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない。」<sup>15</sup> しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。<sup>16</sup> この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」<sup>17</sup> こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなさった数々のすばらしい行いを見て喜んだ。

<sup>18</sup> そこで、イエスは言われた。「神の国は何に似ているか。何にたとえようか。<sup>19</sup> それは、からし種に似ている。人がこれを取って庭に蒔くと、成長して木になり、その枝には空の鳥が巣を作る。」<sup>20</sup> また言われた。「神の国を何にたとえようか。<sup>21</sup> パン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

1 良く知られたたとえ話

先週の礼拝では、ルカ福音書第13章10節から17節、腰の曲がった女を癒したエピソードから、安息日に献げられる礼拝の意味を共に聴いてきました。今週はその続きです。新共同訳聖書では、10節から17節に「安息日に、腰の曲がった婦人を癒す」という見出しが、18節から21節には「『からし種』と『パン種』のたとえ」なる見出しがついているので、別々の場面のようによめます。が、二つの話は、18節「そこで」という言葉でつながっています。つまり、18節以降の芥子種とパン種の譬え話は、腰の曲がった女性を癒した礼拝で主イエスが語っておられた譬えだと分かります。

18節以降の譬え話は、マルコ福音書にもマタイ福音書にもあり、教会生活をつづけている人々にはよく知られたテキストです。しかし、マタイ・マルコとルカとの間には随分違いがあることは、あまり知られていないかもしれません。安息日の礼拝での腰の曲がった女の癒しのエピソードの直後にこの譬え話を持ってきているのはルカだけ。安息日の礼拝での癒しの物語と神の国の譬えには深い関わりがあるとルカは考えたようです。いったいどういう関わりなので

しょうか。また、どうして「芥子種」と「パン種」を主イエスは神の国の譬えとしてお話しになったのでしょうか。いったいぜんたい、「芥子種」と「パン種」は何を指しているのでしょうか。そして、現代を生きる私達が神の国に生きるとはどういうことなのでしょうか、聖書の御言葉から聴いてゆきたいと思います。

神の国は、見かけは日常、しかしその背後には全く新しい「非日常」が働いている。

## 2 人間教

さて、神の国の対極にあるのが、人の国です。今は世界中の国々が新型コロナウイルス感染爆発に呑み込まれたようです。貧しい国の更に弱く小さい人々ほど、困窮しています。何故かと言うと私達人間の国々は、力が支配する世界だからです。それは古代から何も変わっていません。多くの国々が、自分達だけの力・富・名誉と自分達だけが平和・安全を求めて行動してきました。権力者だけではありません。多くの民は、権力者の意向をくみ、自分達の利益や繁栄を計ろうとしてきました。これも古代から変わりません。自分達の利害が損なわれる事にはひどく敏感でも、他の人々が蔑ろにされることにはこのうえなく鈍感。力や富や名誉こそ第一だし、自分達さえよければいい…という価値観は、私達の思考や行動を支配し続けています。まるで私達人間が生まれながらに信奉している宗教、「人間教」に洗脳されているようです。

聖書は、その最初から「人間教」に NO！と言いつけてきました。聖書が忌み嫌い、繰り返し禁止する「偶像礼拝」も、その本質は「人間教」です。人間達が自分達に都合のよい神を偶像として造り、拝むのが偶像礼拝だからです。人間が創造主であり神々が被造物という逆転現象が起こっているのが偶像礼拝であり、まごうことなき人間教。人間教が盛んであるのは、現代世界でも同じ。いや、現代世界ほど人間教全盛の時代はないでしょう。人々は自分達の生活から、色々邪魔くさい注文をつける神を追放し、自分達人間を堂々と神の位置に引き上げ、これを信奉し、人間を神とする危うさに気づいてさえいません。

しかし、人間は神ではありません。被造物である人間が自分の欲望を第一として生きると、結局はその欲望に魅入られ、絡み取られてしまいます。いくら力、富、名誉を得たとしても、「もっと、もっと」と求めてしまう。そして欲望が満足すれば傲慢となり人を人と思わなくなります。実際、この新型コロナウイルス騒動で、人間教の本質をさらけ出した国の指導者に私達は甚大な迷惑を被っています。

旧約聖書、聖書は現実をよく知っている。

## 3 人間の現実を描く聖書

聖書は「人間教」の虜となっている私達の現実をよく知っています。詩篇62で、イスラエルの王ダビデは歌います。「人の子らは虚しい者。人の子らは欺く者。共に秤にかけても、息よりも軽い。暴力に依存するな、搾取を空しく誇るな。力が力を産むことに心を奪われるな。」このように聖書の信仰は、人間の現実を決してなおざりにはしていません。暴力に依存し、搾取を空しく誇り、力が力を産むことに心を奪われる存在であることをよく知っているのです。このように聖書は、私達人間が自分達に対して描く幻想を徹底的に排除した非常に現実的な視点から記した書物だと思います。

何故なら、聖書は「まことの神」を知っているからでしょう。宇宙を造った全知全能の神、私達とは全く異なる存在にも拘わらず、被造物である私達人間と対話し交わり、良き者にして滅びから救おうとされる方。このお方の視線で人間を捉えるからこそ、私達人間の客観的現実にも立脚することができます。

聖書の神は、私達人間の現実の歴史に深く介入してくださいます。いつも私達人間にとっては、意外な、当方もない仕方で介入されます。そもそも神は、先ず「今にも滅びそうなイスラエル民族を神の民として選ばれた」と申命記にはあります。このイスラエルを通じて、全ての人間を神の民とするためです。神を全知全能の神とするなら最も弱い民族を真っ先に選ぶなんて事は、人間教ではありえません。人間を超える神だからできるのです。神は、エジプトで奴隷として迫害されていたイスラエルをモーセを通じ救い出しました。このように、神は人間によって弱く小さくされた者達、人間が忌み嫌うような者達をより深く愛するお方なのです。

この神から言葉をあずかり人々に伝えたのが預言者達です。預言者達は、経済的繁栄を追い求め、弱く小さい仲間を食い物にする権力者達に厳しい審きの言葉を告げました。アモスやホセア達は、北イスラエルの人々が、弱く小さい者達を蔑ろにした故に神はアッシリア帝国を使って北イスラエル王国を亡ぼす…と宣言しています。小さく貧しい人々の尊厳は、国家よりも重いと神は判断されたのです。そんなことを考える神がいるなんて！人間教では考えられません。

預言者の言葉は現実にも即した言葉であり、宗教的な高揚、「我らは神の民だから、必ず戦争に勝つ」というような妄想とも無縁でした。南ユダ王国がバビロニア帝国に攻め込まれ、風前の灯だった時のこと。多くの宮廷預言者達は、「イスラエルは神の国なのだから、決してバビロニアに滅ぼされることはない」という宗教的夢想を語り、神を信じて戦うべきだと主張しました。これは、いわば人間が造り出した、自分達に都合のよい理想です。王も民衆も、宮廷預言者の預言を喜び歓迎しました。しかし、神に召し出されたエレミヤだけは、はっきりと今、南ユダ王国に起ころうとしている現実を神に託されて語ります。「私達の国は、弱者を大切にせよ…という神の戒めを踏みにじり、経済的な繁栄を追い求めてきた。だから南ユダ王国は滅びるし、みな、敵地で囚われの身となる」しかし、それだけでなく、神による希望も語りました。「敵地にあっても神

はあなた達を導き、時が満ちたら、エルサレムへと連れ帰ってくださる。」預言者エレミヤは、人間の理想ではない、神の現実を語りました。神の現実とは、私達人間の現実をしっかりと根差しつつ、その現実を超えた新しい展望を指し示します。先ほど、共に読み交わしたエゼキエル書の17章も、「エジプトに頼ってバビロニア帝国の支配から脱しよう」という夢に逃げ込もうとする南ユダ王国の人々に、神の審きの現実を告げその審きの後にある救いの出来事をも語るものです。神は審きを通して私どもを救おうとされるのです。

#### 4 神の国は、ユートピアではない

この旧約聖書の信仰がその背景にあって、主イエスは、「神の国」の譬えを語っておられます。ですから、主が語られる神の国は、決して人間の理想の国、ユートピアではありません。ユートピアとは、「どこにも場所がない」という意味があるそうです。聖書の語る神の国は、人間の現実を十分に知ったうえで、それを打ち破り、神の力が支配する所です。私達が未だ知らない、経験したことがない、思った事さえない国、神の力が支配する所です。

譬えの中に語られた「神の国」の新しさ

#### 5 譬えの中の新しさ

ですから、神の国は私達にとって常に新しいのです。今日のテキストの譬えにも、神の国の新しさ、意外さが描かれています。芥子種の譬え。これはマルコ・マタイにもあるテキストです。もとはマルコの記事だと考えられています。マルコは芥子種を畑に蒔くとしています。マタイは「畑」を「土」に変えましたが、ルカは「庭」に変えました。ここに神の国の新しさがあります。というのも「**からし種は庭には蒔いてはならない、必ず畑に蒔かねばならない**」と律法の規定で決められていたからです。福音書記者ルカは、ユダヤ人はからし種を庭に蒔かないことを重々知った上で、敢えて「**人がこれを取って庭に蒔く**」と書いたのでしょう。そこには神の国の想定外の新しさが込められているのです。

ではパン種の譬え話はどうでしょうか。「女がパン種を三サトンの粉に混ぜる」とあります。三サトンは、40リットルにあたります。一リットルの牛乳パック40本分の粉と考えるといいでしょう。日常の家事では考えられない位の小麦粉を、この女は練っています。なんとも不思議なこと。これもまた神の国の意外さ、新しさを語っていると言えましょう。

#### 6 ひそかに始まる

この譬えには神の国の別の特徴も語られています。男は種をまき、女は粉をこねる、古代世界の男と女のありふれた日常です。そのありふれた日常の

中に、考えられない新しいことが起こる、しかし、人間の注目は集めることではありません。人間の目には隠されているかのようにして、神の国は始まる…と主は仰っています。芥子種は、一グラムで750粒をも数える、吹けば飛んでいく小さな種です。人間の目には砂一粒と見分けがつかないほどでしょう。そんな微細な種を蒔く所から神の国は起こるのです、始まるのです。また、パン種の譬えでは、主イエスは「**女がこれを取って、三サトンの粉に混ぜると、やがて全体は膨らむ**」と語られますが、この「混ぜると」という単語には、「隠す」という意味があります。白いパン生地の中に隠し込むように、同じく白いパン種、イースト菌を混ぜ込む様子を言っているのですが、パン種とイースト菌、こちらも人間の目には区別が付きません。区別がつかないような些細な種から、神の国は起こります。地面の砂一粒と区別つかないような辛子種が、三、四メートルの大きさに成長するように、ほんの僅かなイースト菌がパンを大きく大きく膨らませるように。神の国の種には、人間を超える大きな力、エネルギーが秘められているのです。

## 7 神の国の種、十字架と復活の主イエス・キリスト

神の国のエネルギーは人間の考えを遥かに超えており、思いもかけぬ大きさで、思いもかけぬ力をもって広がっていきます。その原点、神の国の力の原点は何か？そこから神の国が起こっていくものは何なのか？

主イエス・キリストの十字架と復活でありましょう。神の義なる愛・愛なる義と人間の罪が出会えば、御子キリスト・イエスの十字架しかありえません。義なる神は、私達人間が自分達を神として生きることを見過ごすことはできず、罰せずにはすまされません。神は正義であるからです。しかし、愛なる神は、私達が罰せられ滅ぼされる事に耐えられないのです。だから、ご自身が深く愛する御子イエス・キリストを私達の代わりに十字架につけたのです。神の義なる愛と私達人間の罪が会う所に、神がお立てになったのが、御子イエス・キリストの十字架です。ですから、主イエス・キリストの十字架は、神の私達人間への義なる愛がぐっとぐっと凝縮しています。

この神の十字架の愛が永遠の命を産むのです。それがはっきりと示されたのが、イエス・キリストの三日後の復活。十字架の主イエスが死に打ち勝った時、私達の人間教もまた、基本的に力を失いました。神の義が明らかにされた以上、人間教は滅ぶしかありません。だから、神の国は、十字架の三日後の復活の朝に始まったと言ってもよいでしょう。その中心にいるのは、十字架と復活の主イエス・キリスト、私達の救い主です。

ヨハネ福音書では「**一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。**」という主の言葉を記しています。まさに、主イエス・キリストこそ、私達を救うために死んでくださり、そして神によって甦らされた、「神の国の種」です。神は自ら、ご自身の御子を、神の国の種と

して、世界に蒔いてくださいました。「人間教」の支配を打ち破り神の国を広げるために。

## 8 腰の曲がった女の癒し

神は、神の国の種を蒔いて下さるのでしょうか。それは安息日にささげられる礼拝ではないでしょうか。それを表しているのが、腰の曲がった女の癒しのエピソードだと思います。主イエスは女を癒すことをとおして、ご自身の十字架と復活の出来事によって始まろうとする神の支配のあり方を先取りして、安息日の礼拝で明らかにされたのです。先祖に与えられた神の戒めの本質を忘れ、表面的な体裁にこだわり、自分達の信仰深さを誇ろうとしていた会堂長達、気づかぬうちに神を見失い人間教の虜になっていた会堂長達を、主イエスは神の支配のうちに生きるように、招いてくださっています。安息日の礼拝で、神の国の種を蒔いて下さっているのです。

## 9 教会の歴史の中で

主イエスの十字架と復活は、当初、人間の目にはつかない小さな事件でした。当時の歴史家の誰も目を留めることもなく、ローマ帝国の歴史に書き残されることもありませんでした。今日的な言い方をすれば、マスコミが押し寄せることもなく、SNSで拡散される事などもないような小さな出来事。ですが、この出来事は、空前絶後の神の出来事であり、無限の命の力を秘めていました。イエス・キリストという神の国の種に秘められた命の力は、やがて大きな波となり、人間教に洗脳され囚われていた人々を目覚めさせて、神を信じて生きる新しい命へと造り変えていき、多くの人々がそこに憩う大木に成長しました。

しかし、現代世界では、教会の力がどんどん弱まっています。特に日本の教会はそうです。教会が一つなくなったとしても、すぐ近くに住む人々にさえ何の影響も与えないでしょう。私達の教会も一見すればそのような小さい教会の一つです。今は特に、信徒の方々が日曜礼拝に教会を訪れることさえもできない状況ですから、なおさら。教会は、ウィルスの猛威を前に、命の力を失ったかのように見えます。確かにイエス・キリストを信じればウィルス感染しなくなるのか？ウィルス感染しても癒されるのか？と問われれば、信仰が与えられているからと言ってウィルス感染しないわけでも、確実に癒されるというわけでもないでしょう。もしそうなら人間に都合のよい人間教になってしまいます。

しかし、ウィルスに感染しなくなる、ウィルス感染が引き起こす肺炎が癒される…以上のことが礼拝では起きます。人間が変えられていくという出来ごとが起こるのです。「自分達さえよければいい」という人間教の虜になっている私達が神を知り、利害を超えて隣人を大切にする者、いや、大切にしたいと願う者へと変えられていく奇跡です。私もそうです。皆さん一人一人もそう。主イエ

スによって変えられた一人一人です、腰の曲がりを癒された女であり、神の力の証人なのです。

教会に何か魔術的な力があるわけではありません。教会の礼拝には、主イエス・キリストがいらっしゃるからです。ウィルスが跋扈するような死の世界にあっても、神に愛されていることを知り、神を愛し自分を愛し隣人を愛し希望をもって神の御前に歩む生命こそ、死を打ち破ったイエス・キリストの命。死をも打ち砕く見えない主イエス・キリスト、神の国の種が、私達それぞれの内に与えられています。神の国の種は、礼拝で私達の内に蒔かれるのです。だから、神の国はきれいごとではありません。私達一人一人が日々葛藤する自分のエゴとの闘いの中に、神の国の種であるイエス・キリストは働いてくださいます。神の国とは、実に現実的な命の現場に働いて下さる神の力です。この命の現場を、主イエスと共に、仲間と共にしっかりと生き抜く、人間教が私達に見せる美しい妄想に逃げ込むのではなく、しっかりと与えられた戦いを戦っていく所にこそ、神の国が広がっていきます。

今、私達はそれぞれの場所に散らされています。しかし、決して一人ではありません。イエス・キリストが共にいてくださり、同じイエス・キリストの霊が蒔かれた仲間がいます。自分も皆さんお一人お一人もこのことを忘れることなく、日常生活の隅々でイエス・キリストを思い起こし、色々なことがありつつも、神の方を向いて祈りと賛美のうちに過ごすことができますように、父なる神に祈ります。